



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代日中における「発」を含む二次漢語の成立と交流について〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	畢, 亜莉
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15995号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92385
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yali_Bi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 畢 亜莉

学位論文題名

近代日中における「発」を含む二字漢語の成立と交流について

・本論文の観点と方法

漢字文化圏は日本、中国、韓国、台湾、香港にまたがっており、そのため、近代漢語に関する先行研究は多数ある。本論文は、先行研究において、考察が近代資料、特に代表的知識人の作品に限定されがちであったこと、語彙に関する日中の基礎的・一般的対照研究、幕末・明治期の新語・流行語に関する研究もあるが、特定の学問分野の専門用語や時代を反映する事物名称の研究が主体であり、これらにまさるとも劣らず社会に重要な影響を及ぼしたと思われる抽象概念を表す新漢語の研究が十分に尽くされているとは言えないことを指摘する。たとえば、この時代に相応しい西洋の新概念である「develop、development」が日本語と中国語においてどのように語彙化されたか、という問題は、文化史において重要であるのみならず、両言語の広範な分野に大きな影響を与えた、語彙史上も重要な問題であるが、これまでのところ、両言語を視野に入れた総合的な研究は十分とは言えないと現状を位置付ける。

本論文は、近代における西洋文化の受容において、日本語、中国語両言語において重要な役割を果たした「発」を含む二字漢語を分析対象としてデータを収集し、主として歴史的な変遷の面から考察を行っている。その際の主なテーマは以下のようなものである。漢語における字順(日中同形語と日中同素異順語)の実態、字音語素「発」を含む二字漢語の日本における幕末・明治期の拡大過程の実態はどのようなものであったか、日中同形語「発展」、「開発」の日本語と中国語における成立と受容の経緯と新漢語「発展」の使用の一般化の過程の実態の実証的解明、さらに、関連する形式である、日中同素異順語「発刊-刊発」、及び派生語「发刊辞/词」の成立の過程の実証的解明である。この目的のため、対象となる時代の、日中両国で刊行された各種辞書類を網羅的に調査して概要を把握すると同時に、各種コーパスを駆使してきめ細かな検証を試み、当該漢語の使用実態を実証的に明らかにしたものである。

・本論文の内容

第1章では、先行研究において、考察が近代資料、特に代表的知識人の作品に限定されがちであったこと、特定の学問分野の専門用語や時代を反映する事物名称の研究が主体であり、同様に社会に重要な影響を及ぼしたと思われる抽象概念を表す新漢語の研究が十分に尽くされているとは言えないことを指摘し、研究の必要性を述べる。

第2章、第3章では、中国語の「发」を含む二字漢語「AB」412語、「BA」228語、全部で640語の事例を各種資料から抽出した。また、日本語の「発」を含む二字漢語「AB」147語、「BA」119語、全部で266語を抽出した。その中に「日中同形」138組、「日中同

素異順」63組を確認した。また、日中両言語において、「発」を含む二字同形語に、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味があるもの」は35組、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味がない」は54組、「漢籍・仏書に出典なし」9組であることを示し、「発」を前部要素とする語の生産性が高いことを実証的に明らかにしている。また、「漢籍・仏書に出典あり、近代的な意味がある」語に関して、語基「発」が「育てる、伸びる、成長する、発展する」のような外から内への意味変化があることを指摘した。また、このような「発」の生産性の上昇は、この時期の欧米における進化論の強い影響が一つの要因になっていることを指摘した。

第4章では、日中「発」を含む二字同素異順語は、A類(日中同形+日中両方逆転)、B類(日中同形+日本語一方逆転)、C類(日中同形+中国語一方逆転)、F類(日中逆転)の4種類に大別され、現代日中漢語に使われている語は7組であり、日本語と中国語両言語の字順が逆転された場合の、意味と品詞の変化傾向を明らかにした。

第5章では、字音語素「発」を含む二字漢語の実態を明らかにした。この種の語は、幕末・明治初期に登場する比率が高いことがわかった。その要因として、まず、「発」の訓読みの多さ、同訓異字の多さがあげられ、一般に、このような漢字は日本語における造語力が高い傾向にあることを指摘し、他方、この時期の日本の社会情勢が、富国強兵、殖産興業に基づく文明開化の時代であり、それらに関係する、それまでにはなかった物、制度の生産、創出が急激に進み、それに伴い、それらにふさわしい新しい漢語の作成の必要性が高まったことが背景要因として指摘された。

第6章、第7章、第8章では、それらの具体的な事例が考察されている。例えば、西洋的な概念である **develop**、**development** が日本語と中国語において、漢語を用いて実際にどのように言語化されたかを実証的に調査し、その過程を明らかにしている。第6章では、**develop**、**development** に当たる「発展」が和製漢語であることを明らかにし、さらに、「発展」は中国の留日学生たちが刊行物を通して中国に導入したことを資料で明らかにした。その結果、「発展」の中国語における定着は中華民国成立以後であることを明らかにしている。第7章では、**develop**、**development** に当たる別の語である「開発」について考察している。この語は、中国語においては、最初は仏教語として使われ、その後、一般的な用法として転用されたことをまず明らかにしている。その後、漢語「開発」は近代の日本において新しい意味を獲得し、その後、日本で用いられた「開発」が中国へ逆輸入されたことを具体的な資料を基に実証的に明らかにしている。第8章では、「発展」は日本語において、他動詞の用法から自他動詞両用へ変化し、その後、自動詞用法のみとなったこと、自動詞用法の優勢は「公私」、「事業」の分野における使用の増加と関わることを指摘している。「発展」の勢力拡大は、「発出、舒展、発頭、顕露」のような漢語の廃用と「開展、成長、開発」のような漢語の勢力の縮小と密接な関係があることを明らかにしている。さらに、「開発」後の新しい段階を表現する漢語として「発展」は、積極的な意味合いをより強化されていく過程を資料に基づいて明らかにしている。なお、関連する漢語の事例として、同素異順語「発刊-刊発」の歴史的発達を実証的に調査している。

第9章では、現代日本語と中国語におけるこれらの漢語の使用がどのような経緯を辿ったかが考察されている。それによれば、中国語の「发刊」、「刊发」は明代から使われており、「发刊〇〇」、「〇发刊〇」、「〇〇发刊」の形で「印刷する、出版する」の意味で使われ

ていたことが明らかにされている。このことから、中国語で「創刊する」の意味を持つ「发刊」の用法は日本語による影響ではないかと推測している。他方、日本語において、「刊発」という漢語は見当たらず、「発刊」は1877年頃から使われ始めていることを明らかにしている。常套表現である「発刊ノ辞/詞」が日本語で多用されるようになると、この表現が、その後、「发刊辞/词」のような形で中国語に逆輸入されたことを明らかにしている。